

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

特別展・企画展における展示技法の試み： 国立民族学博物館の現場から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 文男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002175

第2章

特別展・企画展における展示技法の試み

－国立民族学博物館の現場から－

宇野 文男

1. はじめに

国立民族学博物館（以下民博と略す）は1977(昭和52)年に開館・展示場をオープンし、その後さらに常設展示場の増設を繰り返してきた。1989(平成元年)年の6月には、期間を限定した展示場として特別展示館が竣工した。このことによって、従来の常設展示とちがい、特定のテーマや地域で、研究者の「自由性と多様性」を尊重した展示表現が可能な、またさまざまな情報機器や映像機器を用いた展示など、いわゆる「展示の実験」としてのスペースが用意された。

ほぼ夏から秋にかけては開催されてきた特別展は、海外の博物館や美術館からの資料借用をはじめ、規模的、予算的にも大がかりなものである。春に開催される企画展は主として館蔵品を中心にしたもので、予算規模からみても特別展の半分から五分の一程度のものである。特別展は毎年開催されるが、1993(平成5)年は国際先住民年で、急遽「アイヌモシリ－民族文様から見たアイヌの世界」展が計画され、企画展が2本になった。逆に1996(平成5)年秋の第7展示場のオープンをひかえての準備作業の関係から同年春の企画展、さらに1997年春は開館20周年記念行事で、それぞれ企画展を開催しなかった。したがって、特別展としては、昨秋の「越境する民族文化－いきかう人々、まじわる文化」で11回、企画展は昨春の「南太平洋の文化遺産－ジョージ・ブラウン・コレクション」が5回目となった。

これらの特別展や企画展の実施・運営にあたって、1989年、館内の組織替えが行われた。もともと管理部にあった展示課を廃止し、情報管理施設の資料室、技術室を3課とし、情報企画課で資料の整理から展示までを一元化して担当することになった。そして新たに特別展や企画展を長期的に企画・運営する専門官のポストが設けられ、それまでの標本資料係長から、その任にあたることになった。ここでは過去10年間にわたって開催されてきた特別展や企画展の展示の経験をとおして、それぞれの展示の特色を紹介し、新しく試みたさまざまな展示手法や技法と、それに伴

う運営についてふれてみることにする。

なお、この特別展示館の建設意図や特別展・企画展の理念などについては、小冊子『国立民族学博物館における特別・企画展示の基本構想』（1990）と、その特別展がはじまって2年後に書かれた佐々木高明著『特別・企画展示の基本構想』によせて」（『民博通信』第51号、1991年）に詳しいので、そちらを参照いただきたい。

2. 特別展・企画展の準備概要

特別展や企画展の開催計画は、前者は約5年前、後者は2～3年前に提案書というかたちでスタートする。いずれ実行委員長となり、その計画の中心的存在となる教官個人が、個人の主体にもとずいて展示委員会（現在の博物館運営委員会）に計画概要を提案する。その企画が採用されると提案者が中心となって、研究部教官数名と管理部、情報管理施設のスタッフで実行委員会が組織される。時にはその委員会に館外の専門家がはいったり、また共催相手との関係で実行委員会の上に組織委員会が設置されることもある。いずれにせよ、展示プランを具体的に推し進めていくわけである。資料、展示、企画内容、催し物など一回ごとに全くと言っていいほど異なり、実行委員会を中心に関係する部署との連携を、いかに効率的かつ効果的に押し進めることが、重要である。

研究部の実行委員を中心に展覧会全体の構想、展示資料の選定など具体的な作業をスタートさせる。展示資料が館藏品だけでなく他館からの借用となると、その交渉と輸送方法の検討、資料の輸送等に立ち会うクーリエとよばれる学芸員等の招へいなどさまざまな課題がでてくる。資料がある程度めどがつくと、デザイナーの人選がある。デザインも①展示関係、②広報、③カタログのおおきく3つのカテゴリーに分けられ、それらを1人のデザイナーにすべての項目を依頼する場合や、①と②の項目は同じ人で③は別の人に依頼するケースをはじめ、さまざまな組み合わせがありえる。このみきわめも、展示の成功につながる実行委員長の重要な決断のひとつである。展示設計のデザインがまとまると会計上その施工会社の入札が行われるが、設計と施工が異なった場合、意図が十分に伝わらないケースも少なくない。限られた展示予算の中で、会計制度をクリアーしていかねばならないのである。

一方、展示をより盛り上げるためにさまざまな関連催し物、たとえば講演会やシンポジウム、映画会、ギャラリー・トークなどの企画立案が必要である。なかには

歌や踊りといったパフォーマンスの企画も3年目ぐらいからふえはじめ、またここ最近は体験型、参加型を展示に取り入れることが多くなり、それらのプランづくりも企画力、アイデア勝負である。このほか展示のオープンまでには広報のこと、あるいはカタログの作成、展示全体の運営計画などさまざまな検討事項があるが、その詳細は別の機会にゆずって、本題にはいることとする。

3. 特別展、企画展の具体的事例

それではこれから民博で開催された特別展と企画展について、一つずつみていくことにする。特別展と企画展にわけて紹介した方が、わかりやすいかもしれないが、経緯もあるのであえて年代順にし、特に最初に試みた事項を中心に記述し、各展覧会を展示概要とその展示内容、展示関連催し物の3項目に分けて列挙した。表1としてまとめた特別・企画展示実施規模別一覧もあわせて参照してもらいたい。

①特別展示館竣工記念特別展「大アンデス文明展—よみがえる太陽の帝国インカ」

概要：特別展示館が完成したら最初の特別展として、早い段階からペルーの天野博物館の収蔵品を中心とする展示が計画されていた。朝日新聞社とのタイアップし、終了後規模を縮小して全国8会場へ巡回された。

展示：数千年の歴史を持つアンデスの文明の全容を、最新の学術成果を踏まえ、発掘された数々の先スペイン時代の遺品、民博で収集してきた現在も使われている民族資料などを体系的に展示した。展示場中央には、この特別展のために新たにつくられた、インカ文化の約4メートルの石彫のレプリカ「サイウイテの石」が展示された。高さ13メートルの天井からは大きな風景写真の垂れ幕がつるされ、以後この空間利用にさまざまな工夫がなされるようになった。

催し：会期中の毎週土曜日、合計12回の連続講演会と映画会、研究公演「フォルクローレ」を開催。

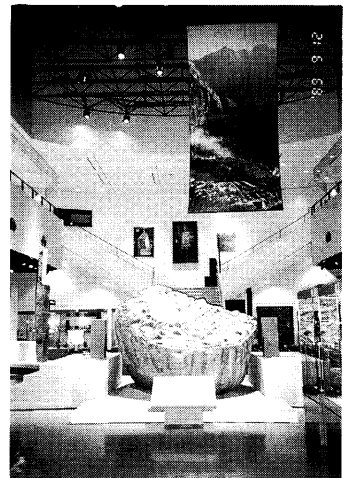


写真1 特別展示館竣工記念の大アンデス展

②企画展「赤道アフリカの仮面－秘められた森の精霊たち」

概要：十数年にわたって収集されてきたアフリカの仮面のなかから、約230点を選びだし、アフリカ各地にある秘密結社の類型と、仮面の造形の背後にある文化を明らかにする。

展示：1階のみの利用で、秘密結社の類型をもとに8つの部屋に仕切り、夜に登場することの多いアフリカの仮面の特徴を生かすため、黒布と照明によって演出された空間に仮面を展示。デコレーターによる黒幕を巻き付けたマネキンに仮面を取り付け、ネームプレートはちぎった紙をピンでとりつけるという手法がとられた。一種のお化け屋敷の雰囲気もあり、口コミによる入館者が相次いだ。

催し：3回の講演会。

③特別展「海を渡った明治の民具－モース・コレクション展」

概要：セイラム・ピーボディー博物館（現在のピーボディー・エセックス博物館）が所蔵するエドワード・S・モースが収集したコレクションの里帰り展。特別展に先立って共同研究「モースとそのコレクションに関する研究」が行われ、その成果も展示にとりいれられ、このスタイルが以後定着した。東京都への巡回準備中、守屋毅実行委員長の死去に遭遇したが、その遺志をついで初めての本格的な巡回展として、東京ルネッサンスでの展覧会を完了させた。なお借用資料は巡回までの間に、すべて「標本画像自動処理装置」で画像処理化された。

展示：地階ピロティエを導入空間とし、マルチスライド（6台）による「解説映像プログラム」を上映。一階では中央に輸送に使われた梱包箱を置き、そこからモノが飛び散ったように同心円状に展示コーナーを配置。紗幕を使った写し絵映像、サインとしての行灯映像などの手法が取り入れられた。2階では書籍や写真、解説

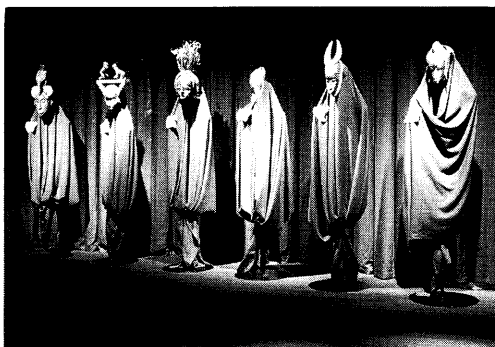


写真2 床や仕切幕も黒で統一された仮面展

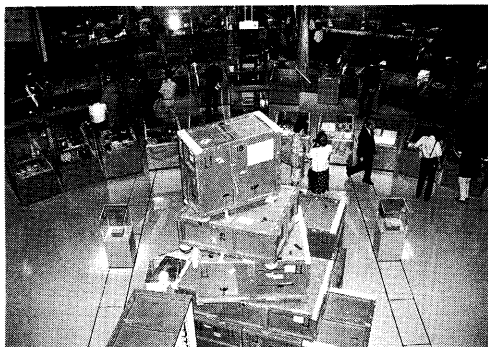


写真3 輸送梱包箱を会場中央に展示したモース展

表1：特別・企画展示実施規模別一覧
特別展

番号	展示名 開催期間（開催日数）	共 催	展示資料（点数）			会場			関連催し物				
			館藏品	国内 借用資料	海外	地階	1階	2階	特別 講演会	みんな のセミナー	映画会	研究公演	その他
①	大アゾレス展 1989.9.14～12.12 (78日)	朝日新聞社 国際交流基金	300	-	640	売店	○	○	9	3	1	1	-
③	モース展 1990.9.13～12.4 (72日)	-	-	-	1,400	解説映像 売店	○	○	3	3	1	1	-
⑤	大インド展 1991.8.1～11.5 (84日)	関西テレビ放送	830	-	-	踊り 売店	○	○	-	1	4	2	古典舞踊と 民俗芸能
⑦	アポリジニ展 1992.9.10～12.8 (78日)	産経新聞社	1,100	-	83	実演 売店	○	○	-	3	2	1	紙芝居13回、 関連催し13週間
⑩	ジャワ更紗 1993.9.9～11.30 (72日)	-	120	260	20	-	○ (売店)	○	-	2	1	-	-
⑫	じゅうたん展 1994.9.8～11.29 (72日)	-	119	8	23	実演 売店	○	○	2	1	1	-	-
⑭	マヤ展 1995.9.14～11.30 (67日)	-	1,200	-	-	-	○ (売店)	○	2	1	-	-	-
⑮	シーボルト展 1996.8.1～11.19 (102日)	ドイツ・日本研究所 読売新聞大阪本社	-	26	717	-	○ (売店)	○	1	2	-	-	-
⑯	大英展 1997.9.25～1998.1.27 (101日)	産経新聞社 NHK大阪放送局 NHKサービスセンター	611	98+a	174	-	○ (売店)	○	1	2	-	-	キャラクター・トーク
⑳	モンゴル展 1998.7.30～11.24 (102日)	財団法人千里文化財団	400	5	60	-	○ (売店)	○	2	2	-	1	ミニコンサート 試着コーナー
㉑	民族文化展 1999.9.9～2000.1.11 (101日)	財団法人千里文化財団	1,800	15	12	-	○ (売店)	○	1	4	2	3	キャラクター・トーク コンサート

企画展

番号	展示名 開催期間(開催日数)	共催	展示資料(点数)		会場			関連催し物					
			館藏品	借用資料 国内 海外	地階	1階	2階	特別 講演会	みんぱく セミナー	映画会	研究公演	その他	
②	アフリカの仮面展 1990.3.15～5.31 (67日)	-	230	-	-	○ (売店)	-	-	-	3	-	-	-
④	ケンペル展 1991.2.7～4.16 (60日)	ドイツ・日本研究所	-	150	-	○	○	-	-	1	-	-	-
⑥	ダゲスタン展 1992.3.12～5.19 (60日)	-	-	370	-	○	○	-	-	1	1	-	-
⑧	鳥居龍蔵展 1993.3.11～5.14 (56日)	-	300	-	-	○	-	-	-	1	-	-	-
⑨	アイヌモシリ 1993.6.10～8.17 (60日)	-	350	50	-	○	○	-	-	2	2	-	-
⑪	台湾先住民展 1994.3.10～5.24 (66日)	-	390	12	-	○	○	-	-	1	1	-	-
⑬	楽器展 1995.3.16～5.30 (66日)	NHKきんぎょメディアアワー	1,522	91	-	○ (売店)	○	-	-	3	-	1	ライヴ・コンサート レクチャー・コンサート
⑰	X線展 1998.3.12～5.26 (66日)	-	60	10	-	○	○	-	-	1	-	-	キャラクター・トーク
⑲	ジョージ・プラウン展 1999.3.11～5.31 (71日)	-	2,211	-	-	○ (売店)	○	-	-	2	1	-	キャラクター・トーク

文などで構成された立体展示パネルで埋め尽くされた。展示全体としては、どちらかといえばより学術的な雰囲気であった。

催し：6回の講演会と研究公演「明治の音と風景」と映画会「活動大写真」。

④「ドイツ人の見た元禄時代ーケンペル展」

概要：1690年にオランダ商船で来日し、長崎出島に2年あまり滞在したケンペルに焦点をあて、その足跡をたどりながら、日独交流の歴史を見直そうとしたものである。ドイツ-日本研究所との共催で、4館で開催され、サントリー美術館について2番目に実施された。

展示：1階では会場はオランダ商船・リーフデ号にスポット照明をあて、寛文長崎図屏風などゆったりと資料を配置した展示の導入空間とし、ドイツ、イギリス、日本各地にあるケンペル関係資料は2階に展示した。

催し：講演会1回。

⑤特別展「大インド展ーヒンドゥー世界の神と人」

概要：広大なインドの土着宗教であるヒンドゥー教の世界に焦点をあて、展示と芸能の公演によってインド文明をわかりやすく紹介しようとしたものである。

展示：1階は「神々と儀礼の世界」をテーマに、圧巻は高さ13メートルのジャガンナートの祭礼用山車であり、それを展示場中央に配置し、まわりを神々の像と儀礼用具などを展示。2階ではインド各地の日常生活用具を展示場を構成した。

催し：2回の古典舞踊の研究公演、4回のインド映画会が開催されたが、特筆されることは、地階ピロティーで連日繰り広げられた操り人形をはじめとするパフォーマンスであった。またこの特別展から企画されたレストランでのインド料理は非常に好評で、これを契機に以後特別展にあわせたエスニック料理、飲み物が用意されることになり、展示に「食べる」(味わう)という要素が加わった。さらにテレビ局とのタイアップによりテレビスポットが頻繁に放映され、夏休みからスタートしたこの特別展は、最終的に11万人の入場者をむかえた。詳しくは栗田靖之著「インド展の計画とその成果」(『民博通信』第55号、1992年)を

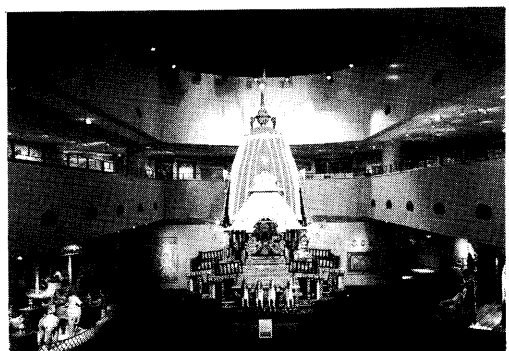


写真4 大インド展では祭礼用山車が組み立てられた

参照していただきたい。

⑥企画展「文明の十字路・ダゲスタン・コーカサスの民族美術」

概要：古来から通商上、文化交流史上きわめて重要な拠点であったダゲスタンの伝統工芸品にスポットをあて、高度な技術と芸術的格調の高さを豊富な作品をとおして紹介しようとした。直前にソ連が解体し、一時資料の輸送に問題が生じ企画展の開催が危ぶまれたが、なんとか間にあった。ただワシントン条約にかかる象牙関係の資料は通関が滞り、会期中頃ようやく民博に運ばれ、このことがかえってマスコミにとりあげられた経緯がある。閉幕後には渋谷区立松濤美術館に巡回された。

展示：ダゲスタン美術館とロシア科学アカデミー・ダゲスタン学術センターから約400点の資料を展示。展示の導入にスライド・コーナーを設けた。

催し：講演会、映画会各1回。

⑦特別展「オーストラリア・アボリジニ展ー狩人と精霊の5万年」

概要：10年来の資料収集、日豪研究者の共同研究をふまえ、狩猟採集民のアボリジニの現代文化を広く紹介することを目的とした。

展示：正面階段下を利用したレプリカによる岩壁画や洞窟壁画、妖精のホログラム、住居復元など、5万年前にタイムスリップし、自然と調和して暮らしてきたアボリジニの世界を総合的に展示。天井には多数の電球によるイルミネーションで正座や神話の世界を再現した。2階では億万時計、虹蛇と星座などをアニメーション、ブーメランの軌跡をはじめ、映像とコンピュータを用いたハイパー・メディア・ワークステーションが登場した。またギャラリー・トークのはしりである会場案内が日・祝日に研究者によって行われ、入場者の好評を得た。

催し：講演会、映画会、「アボリジニのうたとおどり」の研究公演のほか、週末

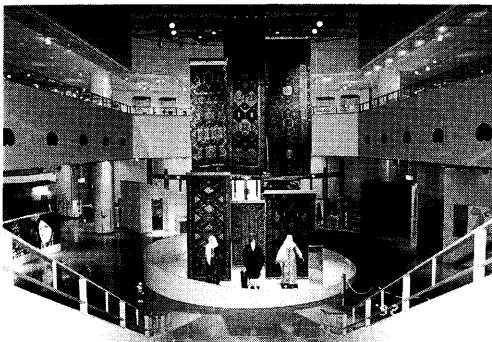


写真5 伝統工芸品が展示されたダゲスタン展



写真6 アボリジニ展の会場でビデオを使っの案内

には砂漠、真珠、石器ウィークなど、さまざまな体験学習的な催しが地階ピロティ
ーで行われた。それらの企画の決定がおくれたため、残念ながら広報がおつつかず、
当日の入館者には好評だったが、入館者増には結びつかなかった。

⑧企画展「民族学の先覚者－鳥居龍蔵の見たアジア」

概要：鳥居龍蔵の没後40年に当たり、鳥居の残した写真と民族資料で、類いまれ
な民族学者の足跡をたどり、アジア諸民族のかつての生活を再現し、その文化の伝
統を理解してもらう試み。共同研究の成果として公開され、「徳島の生んだ先覚者」
として、鳥居の生誕地の徳島県立博物館でも公開された。

展示：1階を6つの地域コーナーにわけ、東京大学総合研究資料館（現在の総合
研究博物館）所蔵の乾板写真と民博所蔵の収集品を一堂に集めて展示した。写真は
あえて大きく引き延ばさず元の乾板の大きさに近いキャビネサイズぐらいにし、特
殊なスポット照明によって、それが浮きでるような演出を行った。

催し：講演会1回。

⑨企画展「アイヌモシリ－民族文様から見たアイヌの世界」

概要：1993年は国際先住民年としてこの企画展が計画され、7名のアイヌの方々
による専門委員会を設置し、わずか半年の準備期間（過去最短）で開催にこぎつけ
た。

展示：衣装と木彫品を中心に、縫いと彫りの伝統的技術によって生み出された生
活用具を展示。正面入り口には、200年ぶりに再現された大陸との交易に使われた、
イタオマチブとよばれる長さ10メートル以上の板綴り船が展示され人目をひいた。
また木村謙次や松浦武四郎の収集した資料もあわせて公開された。

催し：講演会、映画会ともに各2回。

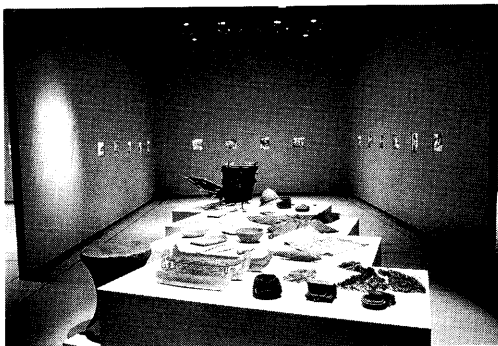


写真7 地域別にモノと写真が展示された鳥居龍蔵展

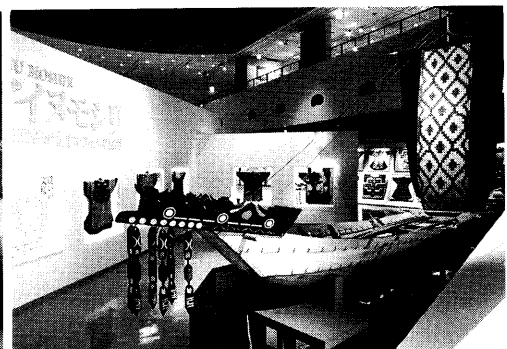


写真8 正面入口の板綴り船、アイヌモシリ展

⑩特別展「ジャワ更紗—その多様な伝統の世界」

概要：インドネシアでは民族ごとに特徴的な染織文化が育まれてきた。これまではほとんど知られなかった、華麗な伝統芸術であるジャワ更紗の多様な伝統の世界を紹介することを目的に企画された。

展示：円形の展示場の壁面に天井までとどく、くさび状に入り組んだ展示壁を設け、そこに更紗を吊り下げた。1階では4つ、2階では5つのコーナーに分けて更紗、その制作用具と工程などを展示した。また会場中央の天井には、吊り下げた布にスライド写真を投影した。

催し：2回の講演会と映画会。

⑪企画展「台湾先住民の文化—伝統と再生」

概要：台湾先住民は9種族に分かれ、日本統治期以来急激に進んだ近代生活のなかで失われた伝統文化と、その変容をわかりやすく展示しようとした。

展示：瀬川コレクションを中心に天理参考館、平塚市美術館所蔵資料、約400点を種族別に映像をまじえて展示。あわせて伝統文化の再生にむけての各方面の方々のメッセージをパネルで紹介した。

催し：講演会と映画会を各1回。

⑫創設20周年記念特別展「絨毯—シルクロードの華」

概要：海外各地から借用した絨毯と館蔵資料を用いて、絨毯の文化的背景と東西文化交流の視点から、改めて我が国と絨毯の関わりを考えようとしたものである。

展示：アメリカ、スペイン、ドイツの博物館・美術館及び高台寺、祇園祭山鉾連合会、徳川美術館などから貴重な資料を借用した。そのなかに重要文化財も含まれ、資料の保存上からも展示場全体の照明をおとし、いわゆる「美術館」的な空間とな



写真9 ジャワ北岸、中部ジャワ様式の更紗コーナー

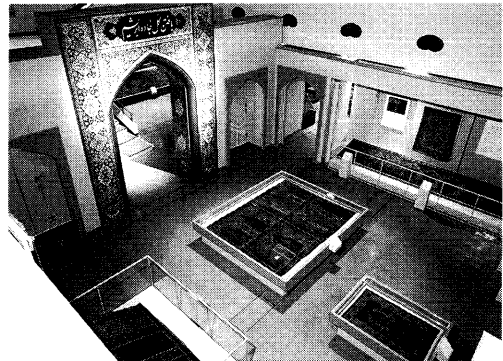


写真10 国内外の貴重な絨毯を展示した絨毯展

った。なお地階ピロティーでは絨毯の製作実演コーナー、バザールに使用された。

催し：3回の講演会と映画会。

⑬創設20周年記念企画展「ラテンアメリカの音楽と楽器」

概要：展示タイトルに「鳴らすと、わかる」のキャッチコピーをつけ、さまざまな楽器、演奏時の民族衣装、映像や音、さらに会場内でのコンサートなどによって、ラテンアメリカ音楽の世界を目と耳で体験してもらおうとした。開催2ヶ月前に「阪神淡路大震災」がおり、常設展示場はガラスの破損などかなりの被害があったが、幸い特別展示館は被災をまぬがれ、本館の復旧作業と同時進行で企画展の準備が行われ、かろうじて予定通りオープンできた。

展示：展示会場には約1,000点の楽器と衣装が展示されたが、1,000本以上のドラム缶を積み上げて演出した展示の構成は、地震後のこともあり、何度も補強安全対策が練られた。また会場中央にはステージを設置し、会期中、ライブ・コンサートを毎日4回、レクチャー・コンサートをほとんどの土・日に行った。「親しみやすく、明るい」ものにしたいとの意図で会場内での本格的なコンサートを行った。その一方で聴衆の乗りが悪いこともあり、賛否両論であった。2階には、はじめてマルチメディアコーナーと鳴らせる工夫をした楽器を置かれた。

催し：3回の講演会と「ボリビアの音楽と踊り」の研究公演。

⑭特別展「現代マヤー色と織に魅せられた人々」

概要：グアテマラを中心とするマヤーの人々の色彩豊かな衣装を中心にそれを生み出す道具類、生活用具などを用いてマヤー人の生活を紹介。

展示：1階の会場の半分近くを言語グループごとに民族衣装を着付けたマネキンで埋めつくし、残りを市場の再現にあてた。階段状に整然と並べられた数多くの民

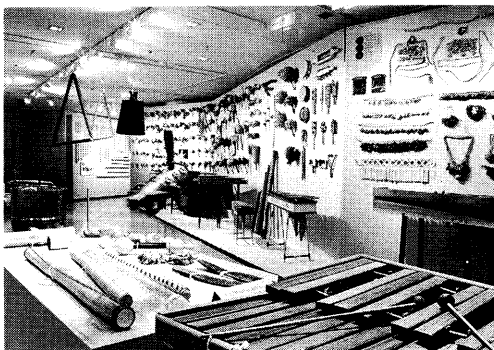


写真11 楽器展の試奏コーナーと壁いっぱいの楽器

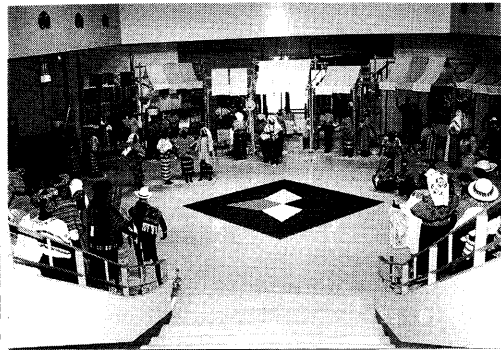


写真12 床に方位サインが設けられたマヤー展

族衣装群は壮観な感じとなったが、その一方で展示壁がなく会場全体が見渡せるためにこれだけでも受け取られた。2階では「織りの技術」「マヤの生活」「儀式と日常」のテーマにわけ、さらに機織りの体験コーナーを設けた。

催し：3回の講演会。

⑮生誕200年記念特別展「シーボルト父子のみた日本」

概要：シーボルト父子と日本との出あい、そして日本へのまなざしとのあいだで生まれたコレクションを通して、日欧文化交流に大きな足跡を残した父子の業績をたどり、父子の見た日本の姿を再現することを意図した。なおこの特別展は林原美術館（会場の都合で規模縮小）を皮切りに、江戸東京博物館のあと民博で公開された。

展示：1階の円形の壁面をぐるっとまわって、サブ階段を上がり2階を一巡して、正面階段をおりてくるコースが初めて設定され、そこに芝増上寺の御霊屋遺構が再現された。サブ階段で2階へ上がる順路設定ははじめての試みであった。

催し：2回の講演会とシンポジウム。

⑯開館20周年記念特別展「異文化へのまなざしー大英博物館コレクションにさぐる」

概要：西洋、アフリカ、オセアニア、そして日本、「異文化」に対するまなざしそのものを問い直す試みで、大英博物館のコレクションを中心に、民博のコレクション、さらに国内の多数の美術館・博物館のコレクションの組み合わせで特別展が企画された。閉幕後、世田谷美術館でも公開された。

展示：写真を用いて現在からタイムトンネルで、100年前の世界にタイムスリップし、「西洋のみた異文化」として100年前の大英博物館民族誌ギャラリーを再現。

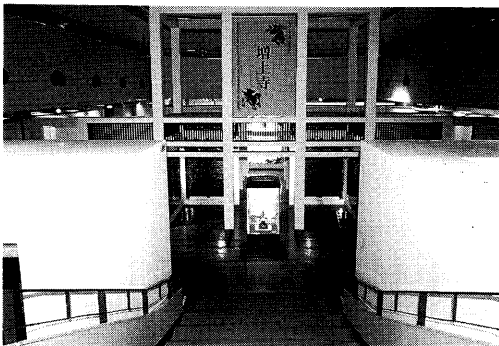


写真13 シーボルト展の芝増上寺のコーナー



写真14 100年前の大英博物館の展示場が再現された

写真を頼りに展示ケース、照明器具、サイン2階に「異文化としての西洋」「日本のみた異文化」、階段をおりて「越境する現代の文化」に至る。そこにはキオスク、顔出し看板、ブリクラなどが展示され、話題を集めた。キオスクの陳列品も含める展示総点数は1万点近くになった。

催し：2回の講演会とフォーラム。展示場での解説を公式的に初めて、ギャラリー・トークとして9月から1月まで毎月1回開催。

⑰企画展「なかは どうなってるの?—民族資料をX線でみたら」

概要：民族技術の調査や研究のためや民族資料の保存を考える手段の一つとして、展示場や収蔵庫にあるさまざまな資料にX線をあて、内部構造を明らかにしたX線の画像とモノを展示し、モノのなかに秘められたさまざまな側面の紹介。

展示：1階のみの展示で、もともと経費のかからない展示として計画されたが、民博で開発した超薄型X線フィルム観察(展示)装置を使うなど、結局思惑どおりにはいかなかった。展覧会そのものをインターネットにのせ、バーチャル企画展の実現や、小学校を対象とした子ども用ワークシートの配布も企画された。

催し：講演会1回、ギャラリー・トーク隔週の土曜日。

⑱特別展「大モンゴル展—草原の遊牧文明」

概要：モンゴルの歴史、生活、生業などについて幅広く紹介し、遊牧世界のあり方から人類や地球の未来を考えてみようとしたものである。

展示：会場入口には今回のために作られたキョル・テギン碑(レプリカ)がおかれ、段ボールで作ったヒツジによって動線が表示され、からくり壁面と生活絵巻があり、そして伝統的、未来、マルチメディアの3つのゲルへと誘われる。この特別展にあたって3つの展示コンセプトが設定された。舞台照明による時空間の演出、

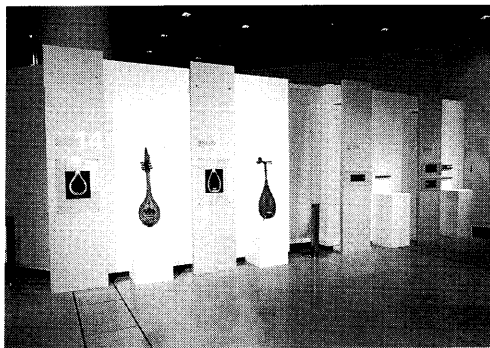


写真15 X線写真とその実物が対で展示されたX線展



写真16 会場全体が天幕にみたられた大モンゴル展

参加型展示の実現、マルチメディアによる情報展示の試みである。2階には馬頭琴の試奏コーナーや好評だったモンゴル衣装の試着コーナーなどがあり、「さわってOK」マークの展示資料を含め、今までにない1階での展示方法や、本格的な参加・体験型の展示となった。またはじめて、会場でお手伝いいただくボランティアの導入にふみきった。

催し：講演会4回、研究公演1回、毎土・日曜日に会場内でミニコンサート。

⑱企画展「南太平洋の文化遺産—ジョージ・ブラウン・コレクション」

概要：1985年と1986年の2回にわけて民博に受け入れた、ジョージ・ブラウンが約100年前に南太平洋で収集した約3,000点の民族資料の展示。

展示：コレクションの展示であるからして、やはり大量にみせる必要があり、苦肉の策として、収蔵庫で使用している移動式の棚を用いた「収蔵展示」風の展示方法を提案。その企画が採用され、約2,000点もの資料が会場に並んだ。コレクションのひとつの見せ方として一石を投じた。

催し：講演会2回と映画会。そして毎土曜日にギャラリー・トークを開催。

⑳特別展「越境する民族文化—いきかう人々、まじわる文化」

概要：文明史的な大転換期において、近代の時間認識(暦)と空間認識(地図)を軸に、民族文化を中心とする文化の越境する様相を示そうとするものである。

展示：入口に世界の三猿を並べ、1階を「越境する人々」とし、暦、ことば、地図、音楽、インド映画の各コーナーを設けた。床に文字や写真などの解説がシールで貼られたり、コンピュータや映像を随所に取り入れた。2階は「主張する先住民文化」オーストラリアのアボリジナル、イヌイット、アマゾン、カラハリ砂漠のコーナーが設けられた。それぞれの展示は理解できても、全体としてはテーマの難解



写真17 ジョージ・ブラウン・コレクション展

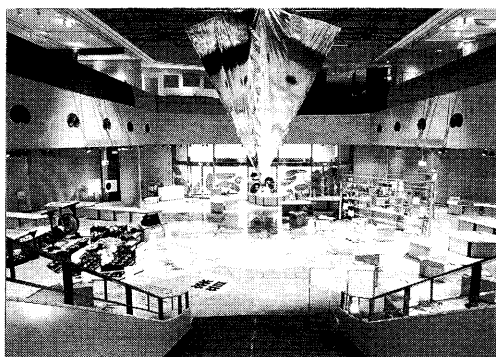


写真18 正面階段からみた民族文化展の展示風景

さと展示構成のわかりにくさからか、集客力はいまひとつであった。

催し：講演会5回、研究公演3回、映画会2回、毎週土・日・祝日にギャラリー・トークとそれにあわせた9回のミニコンサート。

4. 分析と考察

展示テーマと内容の類型

これまで紹介してきた特別展や企画展は、いずれも研究成果の公開である。『基本構想』における「展示テーマと内容の類型」にしたがって、少し整理してみると次のようになる（表2参照）。

1)常設展示で欠落している地域の展示：大インド展(⑤)、オーストラリア・アボリジニ展(⑦)、台湾先住民展(⑪)などがそれに該当する。大インド展で展示された資料は、5年後の1996(平成8)年によく南アジアの常設展示場がオープンし、その一部が再公開されている。

2)通文化の展示：赤道アフリカの仮面展(②)、ジャワ更紗展(⑩)、絨毯展(⑫)、ラテンアメリカの楽器展(⑬)などで、ある一定の地域の仮面、更紗、絨毯、楽器などをいわゆるクロスカルチュラル展示としてとりあげた。

3)研究成果に基づく特定のテーマに沿った展示：通文化展示とも関連した特定のテーマをとりあげたものと、モース、ケンペル、鳥居龍蔵、シーボルト、ジョージ・ブラウンといった特定の個人(収集者)の展示にわけられる。

4)既存の館内外のコレクションの展示：コレクションの定義が難しいが、館外のものとしては、モース、ケンペル、シーボルト、民博所蔵分は鳥居龍蔵、ジョージ・ブラウンなどであり、そのほか民博の創設以来、長年にわたって行ってきた収集活動による未公開資料の展覧会も数多く行われた。

5)新着資料展示のよそおいの再構成：実現はしていない。

6)映像音響やパフォーマンスを主体にした展示：スライドから出発した映像展示は、ビデオ、映画、マルチメディア化と回をかさねるごとに各種の媒体を多角的に用いるようになった。パフォーマンスも当初は地階で行われていたが、展示会場内で展示風景(雰囲気)をバックに行われるようになった。それは観客にとっても展示と同空間で体験できるわけで、展示をより理解できたのではないだろうか。ただその場合、照明や音響設備を事前に検討しておく必要があることはいうまでもない。

表2：展示テーマと内容の類型

番号	項目 展示名	1) 地域	2) 通文化	3) テーマ	4) コレクション	5) 新着西博域	6) 映像音楽 とパフォーマンス	7) 巡回
①	大アンデス展*	○						○
②	アフリカの仮面展		○	○	○			
③	モース展*			△	◎			○
④	ケンベル展			△	◎			○
⑤	大インド展*	◎			○		○	
⑥	ダゲスタン展	○						○
⑦	アボリジニ展*	◎			○		○	△
⑧	鳥居龍蔵展			△	○			○
⑨	アイヌモシリ	○						
⑩	ジャワ更紗*		○	○	○			
⑪	台湾先住民展	◎						
⑫	じゅうたん展*		○	○	○			
⑬	楽器展	○	○	○	○		○	△
⑭	マヤ展*	○			○			
⑮	シーボルト展			△	◎			○
⑯	大英展*			○				○
⑰	X線展			○				
⑱	モンゴル展*	○			○		○	△
⑲	ジョージ・ブラウン展			△	◎○			
⑳	民族文化展*			○	○		○	

展示名の*印は特別展で、それ以外は企画展。

- 1) ○印は一つの地域の展示で、◎印は特に常設展示で欠落している地域の展示。
- 3) △印は特定の個人の展示。
- 4) ○印は民博で収集してきた資料、◎印は海外のコレクションで、そのうちジョージ・ブラウン資料民博でコレクションとして購入したものの展示。
- 7) ○印は当初から巡回展として計画された展示。△印は閉幕後に新たに展覧会が企画された。

7)館外における巡回展：当初から巡回展を計画し、その巡回先と共同作業で準備した展示と民博で開催中あるいは閉幕後に申し出があり、巡回したものとわかれる。前者の場合は、あらかじめカタログや資料の取り扱いなどの業務や経費等について、あらかじめ相手先と分担することができ、お互いにメリットがあった。

展示技法の種類

次に20例の展覧会を展示技法の種類からみると、標本展示、映像展示、音響展示に区分される。それにパフォーマンスが加わる場合もある。過去の展示では標本資料の展示を中心に開催されており、映像・音響展示は単独での展示としては実施されていない。展示をより効果的なものにするために、映像や音響が積極的に取り入れられている。

その推移をみると、まず音を使い始めたのは、第2回目の赤道アフリカの仮面展(②)やケンペル展(④)で、会場にBGMが流され、モース展(③)ではマルチスライドの解説映像、紗幕の写し絵映像、行灯映像の手法がとられ、大インド展(⑤)において、はじめてビデオ映像が用いられた。また関連催しとしても民族舞踊や操り人形などのパフォーマンスも行われるようになった。アボリジニ展(⑦)にいたっては、コンピュータ・グラフィックスやマジックビジョンが使われ、体験学習コーナーも実施された。さらに会場の天井にはアボリジニの神話を題材にした星空の演出が施された。その後ラテンアメリカの楽器展(⑬)では、会場内にコンサートステージを設けての生演奏、試奏コーナーの設置、モンゴル展(⑱)ではさらに照明デザイナーによる空間演出やマルチメディアの導入、多くの体験・参加を取り入れた展示へと展開していった。最近の越境する民族文化展(⑳)コンピュータをもっとも多くとり入れた展示になり、また会場からはFM放送を流したり、さまざまなイベントが行われた。

数多くのイベントを企画することは、展示を理解してもらう一助として、またより充実させるため、いいことではあるが、広報や実際の運営のことを念頭にいれておかねば、とんでもないことになる。しばしば研究者と事務担当者とのあいだで衝突が起こりうる。たとえば広報のタイムリミットである展示のチラシができる2～3ヶ月前には、イベント計画の全容がほぼ決定されることがベストであるが、往々にして開幕前にずれ込むことがある。せつかくのよい企画であっても告知の問題や、十分に対応できるスタッフと経費の確保など運営計画の策定に支障をきたしてく

る。イベントは一定のパターン通りではないので、過去のノウハウが必ずしも通用しなく、その実施にあたってはマニュアル通りにいかない。

またスタッフと予算には限りがあるわけで、どのような手段に重点を置いて発表したいのか、そのことを明確にしないと計画自体が迷走しはじめる。パフォーマンスや催しもの多い展覧会では、そこで使われる機器類のメンテナンス経費も含め、一般的なそれに比べ一段と経費と運営方法に手間がかかるのである。したがって、盛りだくさんのイベントを実施する場合は、十分な事前準備と調整が不可欠である。

5. 最近の常設展示について

以上、今まで特別展や企画展を中心にさまざまな展示技法の試みを紹介してきたが、本館の常設展示場のことにも、若干ふれておく。1996(平成8)年に第7展示棟が完成した際、映像の広場、ものの広場、南アジアがあらたに設けられた。映像の広場では、マルチビジョンの大画面に研究者みずからが番組を通して、民族学の現代的課題を語りかけるスペースが用意された。またものの広場では、新たに開発した「Dr. みんぱく」によって、モノに関する映像や情報とその表示装置でみることができるようになった。さらに南アジア展示では、天井からの吊り下げの多用化、展示什器の低コスト・高品質・軽量化をもとに、ステージはすべて手すりをなくす、ネープレートの軽量化と印刷方法の簡易化など従来の改良を図った。これらの展示のオープンにあわせ、東南アジア展示のリニューアルも同時に実施された。そのなかで特にパティオの活用として、「海の生活」コーナーでマレーシアの家船を一部切断し、ガラス面をはさんでその一部はパティオに展示した。展示場からみれば、あたかも船が港から出港していくように意味合いであるが、資料を切断する意味づけや保存の観点など、かなりの議論を経て実施されたのである。

その後1999(平成11)年には、携帯端末としての「みんぱく電子ガイド」が開発され、公開され、さらにビデオテーク及び朝鮮半島の文化展示のリニューアルが2000年3月に行われることになっている。

このように常設展示場においてもさまざまな展示の試みが行われ、開館当時の展示基本構想と関連させながら、特別展などの展示技術の成果をもとり入れて、現時点にマッチした展示手法が採用されているのである。

6. まとめにかえて

以上、特別展や企画展を中心に民博におけるさまざまな展示の試みについてみてきた。新しい展示技法とは何か、今一度考えてみることにする。今まで紹介してきたことは、いずれも新しい展示技法とよぶには若干の抵抗があるが、さまざまな展示の趣旨や内容、あるいは形態に対応して試みた一種の展示手法である。それは単にモノを展示するデザインや演出といったものではなく、むしろ展示全体の構成のあり方ではないだろうか。あくまでも展示資料、いわゆるモノや情報があって、それらをどのように一般の来館者に理解させ、伝えようとするのか。そのためには映像を使ったり、音を出したり、また講演会やシンポジウム、踊りやパフォーマンスなどさまざまなイベントが加わる。さらにミュージアム・ショップなどの展示関連グッズの販売によっても、見学後も楽しめるといったことがありえる。展示という表現は、それをみた観客が自分で納得したときにコミュニケーションが成立すると言われている。そのためには、どのように展示物を見てもらいたいのか、展示側からの主張やメッセージもわかりやすくなければならない。モノ、情報、映像・音響、実演、そういったことが体系化し、調和してはじめてわかりやすい展覧会となるのではないかと考える。

わかりやすいといえば、展示名称も同様である。最近は苦心して考えた展示名称が、一般の方々に理解してもらえないケースが多い。「名は体を表す」ように展示名称はわかりやすいにこしたことはない。ここでは入場者数については、それで展示の評価をするものではないとの観点から、あえてふれなかった。ただ展示タイトルに「大」が入った大アンデス文明展、大インド展、大モンゴル展の3つは、入場者が10万人をこえた。ネーミングも展示を考える上で重要なポイントの一つであることを付け加えておきたい。

最後に今後も展示の実験の精神を再認識し、民族学の研究成果の公表の場として、今までのノウハウを継承しつつ、時代の要求や来館者のニーズにあった展覧会が企画されることを望むものである。

追記：この小論をまとめるにあたっては、それぞれの特別展、企画展の計画書、チラシ、パンフレットさらに図録(解説書)などを参照した。一部記憶をたよりにコメントや、記述したところがあることをお断りしておきたい。また以下の関連記事

も参照いただければ幸いである。

佐々木高明

1991 「『特別・企画展示の基本構想』によせて」『民博通信』51、pp.23-33

中牧弘允

1991 「錦影絵・幻燈・活動大写真」『民博通信』53、pp.31-37

長野泰彦

1991 「大インド展におけるパフォーマンス展示－経緯と民俗芸能紹介」
『民博通信』54、pp.26-32

栗田靖之

1992 「大インド展の計画とその経過」『民博通信』55、pp.41-57

国立民族学博物館情報管理施設

1992 『企画展「赤道アフリカの仮面」アンケート調査報告』

松澤員子

1994 「台湾先住民の文化を終えて」『民博通信』65、pp.61-63

杉村 棟

1995 「特別展『絨毯－シルクロードの華』をおえて」『民博通信』68、
pp.20-22

山本紀夫

1995 「ライブ・コンサートの試み－『ラテンアメリカの音楽と楽器』展か
ら」『民博通信』69、pp.38-42

栗田靖之

1997 「情報展示への道－第七展示場のオープンに際して」『民博通信』75、
pp.76-85

田村克巳

1997 「東南アジア展示のリニューアル－経過と問題点」『民博通信』78、
pp.87-101

立川武蔵

1997 「ヒンドゥイズムの展示」『民博通信』79、pp.62-69

吉田憲司

1998「フィールド・ワークとしての展示－特別展『異文化へのまなざし』の記録・抄（上）」『民博通信』82、pp.38-60。

森田恒之

1998「企画展『なかはどうなってるの?』の中はどうなってるの?」『民博通信』82、pp.61-69

小長谷有紀

1998「1998年度特別展『大モンゴル展－草原の遊牧文明』の生起」『民博通信』82、pp.70-79

1998「問わず語り『大モンゴル展』のその後」『季刊民族学』86、pp.111-116、千里文化財団

吉田憲司

1999「フィールド・ワークとしての展示－特別展『異文化へのまなざし』の記録・抄（下）」『民博通信』83、pp.44-67

栗田靖之

1999「みんなく電子ガイドシステムの開発」『民博通信』85、pp.39-50

石森秀三

1999「企画展『南太平洋の文化遺産－ジョージ・ブラウン・コレクション』の報告」『民博通信』85、pp.51-58

イチンホローギーン・ルハグバスレン

1999「特別展『大モンゴル展』の意義」『民博通信』86、pp.39-43

庄司博史

2000「特別展示『越境する民族文化』－言語コーナー『他言語化する日本社会』」『民博通信』87、pp.73-90

宇野文男

2000『みんなくコレクション』千里文化財団